

『夢をもって』

私の部屋には、書家の知人に書いていただいた大きな「夢」の字が飾られています。研究生活を送るうえで、「夢」を持つことを大切にしていて、研究室にインタビューに来る学生さんにもいつも話をしています。

この度、武田医学賞を受賞するにあたり、私自身が研究者としての「夢」を持つようになったきっかけを思い直してみると二つの機会があったと思われます。一つ目は、大学の学部学生の際に、世界的な基礎免疫学研究者で、内科の教授に就任された岸本忠三先生の臨床講義を受講したことです。基礎研究の成果に基づき、難病の病態を見事に解き明かす講義に感銘を受け、岸本先生のような基礎医学研究者をめざしたいという「夢」を持ちました。その後、卒業して岸本先生の主宰する内科で臨床研修を行ったのですが、当時の内科（特に、難病を診る大学病院）では、治すことのできない患者ばかりを診ているような感覚でした。中でも、十代で発症した炎症性腸疾患の患者に対し、当時内科

では絶食を強いて、点滴を施すことぐらいしかできませんでした。そこで、将来何とかして難病治療を実現したいという二つ目の「夢」を持ちました。このような夢をもって、免疫学研究の世界に飛び込んだのです。

「夢」は持つだけではなく、その実現のために一歩を踏み出すことが重要です。そして、その一歩を踏み出すためには、「夢」に対する信念、何としても実現させたいという情熱をもつことが必要です。信念や情熱を伴った「夢」を持つことができれば、あとはそれを実行に移し継続するだけです。思い返すと、私はこのような姿勢で研究生活を送ってきたように思います。

「夢」に向かって実行し、継続するといっても、やみくもに何でもやってみるだけでは、実現に向かって進まない場合もあるかと思えます。その点で私が幸運だったのは、斬新な研究構想と理路整然とした研究計画を組み立て、研究を成功に導く審良静男先生という恩師に出会えたことです。研究者として駆け出したときに、研究構想、研究の道筋を立てる方策の重要性を知ることができたことは、私にとっての



大きな財産です。このような中で夢中になって研究に勤しんでいる時に、ある遺伝子変異マウスが予想外に炎症性腸疾患を発症することを発見しました。そして、独立してから、このモデルマウスを題材に炎症性腸疾患という難病の克服のため、腸管の恒常性維持機構の解明をめざした研究を行ってきています。難病を克服し、世界に貢献できる研究者という「夢」は、まだ道半ばですが、その「夢」に向けて、さらに精進していきたいと思っています。

このように私が「夢」をもって研究することを大切だと考えるのは、歴史小説が好きなこととその一因があるのかもしれませんが。特に幕末を描いた小説を若い時からよく読んでいて、その中で吉田松陰氏の「夢なき者に理想なし、理想なき者に計画なし、計画なき者に実行なし、実行なき者に成功なし、故に夢なき者に成功なし」という言葉に大きな影響を受けているのだと思います。これと似た言葉は、明治時代に日本経済の礎を築いた渋沢栄一氏の夢七訓にも見取れます。

皆さんも、何か信念をもてるような「夢」をもってそれに向かって一歩を踏み出してください。そうすることによって、私の場合は岸本先生、審良先生という恩師に出会うことができ、道が切り開かれました。「夢」は、それに対する信念や情熱があるものであれば、どんなものでもよいと思っています。皆さんも、一歩を踏み出せば、必ず道が切り開かれていくものと思います。